筑波大学資料による復元研究成果の公開
《江戸前期の湯島聖堂》の展覧会を終了して

守屋正彦
人間総合科学研究科教授

学術資料の復元公開

昨年10月8日（土）から10月30日（日）まで筑波大学附属図書館（中央図書館貴重書展示室）で開催された《江戸前期の湯島聖堂》の特別展は従来の、既存の博物館や美術館で開催される展覧会とはやや異なり、研究上でのプロセスを示し、研究途次での公開を行う展覧会であった。したがって完全な形での展覧会ではなく、論文でいうならば「仮説に基づいて、このような想定が成り立つのではないか」という推論上の示し方であったということができよう。

チラシに掲げたうたい文句は「甦るイメージ、草創期の湯島聖堂」と掲げ、「どのような孔子像が祭られ、聖堂内部の礼拝空間はどのようであったか？筑波大学に残された湯島聖堂資料から在りし日を推理。そのイメージを学術研究の途次で広く公開し、新たな復元の道を探る。」と能書きを付したのであった。

期間中の公開日数は21日、来館者は1780人に及んだ。

なぜ筑波大学に湯島聖堂の資料があるのか

湯島聖堂は御茶ノ水駅の東口から神田川を挟んで対岸、聖橋を渡った右手の森に今も位置している。その湯島聖堂の西隣は、もともとは江戸時代の最高学府であった昌平坂学問所、現在の東京医科歯科大学である。聖堂と学問所、両者合わせたその敷地は筑波大学のはるかなる前身校、東京高等師範学校があった場所であった。江戸幕府の武家の子弟の教育は儒教を学ぶ聖堂と学問所が一体のもので、かつては各地に存在し、現在でも岡山県の閑谷学校などに往時の姿を偲ぶことができる。

さしずめ湯島聖堂はその総本家であったが、明治になって徳川幕府の思想の象徴であった聖堂は無用のものとなった。礼拝諸像、また什器什宝の品々はすべて歴史の遺

物として浅草文庫に保管された。維新後、大学（現在の東大）本校、ついで文部省博物局、さらにわが国初の博覧会場を経て、明治5年から師範学校となり、その後は東京師範学校、高等師範学校となったのである。

明治の中頃になると、湯島聖堂ならびに昌平坂学問所の資料は多くは浅草文庫から国会図書館、国立公文書館（内閣文庫）、東京国立博物館へと移管された。その後、高等師範学校長であった嘉納治五郎が唱導し、昌平坂学問所を知る教師によって孔子祭典が復活したのを契機に《歴世大儒像》6幅（図1）、《賢儒図像》扁額下絵14面（本来16面、2面欠失）などが高等師範学校に保管され、現在の筑波大学に伝来することになったのである。



図1　歴聖大儒像（筑波大学附属図書館）

学術資料の展示と復元成果

展覧会は三菱財団の研究助成が端緒となり、その折の芸術教員組織の復元研究チームがさらにそれを発展させて成果の公開をすすめるにいたった。幸いなことに財団での研究が評価され、美術史と復元研究チームの両者で科学研究費の助成を得ることができ，美術史研究（守屋研究室、図2）をもとに日本画（藤田研究室）、彫刻（柴田研究室）、コンピュータ・グラフィックス（木村研究室）による復元研究、その試行的な研究に多くの学生が参加できたのは、これからの研究と教育のあり方を共に考える上でも貴重な経験であった。



図2　東京国立博物館での浅草文庫調査
（中央が筆者）

展示室では大学所蔵の《歴世大儒像》6幅、《賢儒図像》扁額下絵14面、昌平坂学問所日記、および書簡等文書資料、それに東京教育大学旧蔵資料である狩野探幽・狩野尚信の屏風が展示され、併せて復元成果として《賢儒図像》扁額下絵の失われた2面、湯島聖堂の草創期から安置された孔子像と四配（顔子、曽子、孟子、子思）の五体の彫刻、それにそれらに至る広い空間で展示を行ったのである。

復元は単なる学術上の資料調査から得られる以上の収穫をもたらしたのである。もっとも大きな収穫は彫刻像の調査と復元

制作の過程で明らかとなっていった。

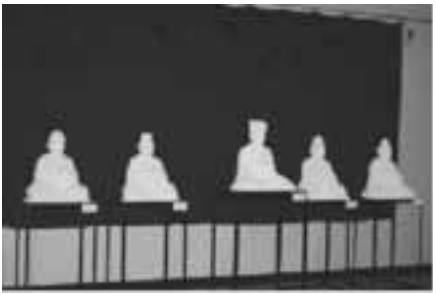


図3　孔子像・四配像の復元制作



図4　孔子像の復元（柴田良貴教授）

・孔子像および四配像が湯島聖堂に安置される前の林家のあった上野忍ヶ丘の孔子廟に祀られていたこと
・5体の像が仏師の制作によること
・日本独自の胡坐像であること

があげられる。

特に胡坐であることと仏師が制作したことは結びつくことであるが、それらのことからは徳川幕府の儒教採用が極めて慎重な導入であったのではないかと想定できることである。本来儒教の像は立像あるいは倚像で、胡坐像は大陸にない造像例である。加えて仏師による制作はそれまでの仏教的な様式を下地に新たな礼拝像を生み出した感が強く、仏教などの在来宗教と敵対しない、緩やかな浸透が図られたと捉えることができるものであった。

復元制作（図3、図4）ではこのあたりを考慮して、明治期に下岡連杖によって撮影された唯一の写真を手がかりに細部が十分に明らかでない写真情報から復元を試みたのであった。復元では2次元の小片写真から3次元の立体像を制作したが、写真では明らかとならなかった胡坐の下に敷かれた布が、実際には儒者の衣服の裾の部分を敷布として作られたことも明らかとなり、特に仏教の胡坐像に似せた、同調的な嗜好と捉えることができたのである。

研究のレビューと評価

私たちが行った復元研究成果の公開はわが国の文化や思想研究にどのように生かされるかについて、その指針を十分に得ないまま進めて来たため、いずれは周辺諸学との学際研究に発展することを念頭においており、それまで隔靴掻痒の感があったのである。研究途次での成果公開はそのような研究の指針を一方で得ることを目的としていた。それは本学が芸術の研究成果を反映しつつ、そのレビューに応える総合大学だ

からこそできる展覧会であった。

研究の方向について私は極めてよき研究の理解者に恵まれた。それは2000年に本学で狩野探幽をはじめとする新出屏風の公開の折から評価いただいた歴史学の今井雅晴教授（日本語日本文化学類長）にまず展覧会カタログのご寄稿を得、この試みに快くご賛同いただき、このほか、湯島聖堂ならびに昌平坂学問所資料について山澤学講師（歴史人類学系）のご寄稿を得、中央図書館の篠塚富士男氏にこれらの研究蓄積に関わる電子図書館によるアーカイブのあり方についてもご寄稿いただき、将来の学際研究への新たな可能性を示していただいたことである。

また江戸前期の湯島聖堂を巡る諸像の陳列のあり方が、徳川幕府が儒教を採用した当時の政治的な配慮の表象として解釈する、そのような研究上の仮説を提案する機会となった。この試みはこれまでの文献上の解釈からは得られない学際的な研究を可能とするものであり、改めてわが国の近世における幕府と儒教、その解釈の俎上におかれるべき研究対象へと広がるものであった。

会期中には徳川記念財団と江戸東京博物館の学芸員が来学し、博物館において企画する江戸前期の展示テーマとして考慮する方向が検討され、また湯島聖堂の運営を行う斯文会（石川忠久理事長）が本展による内容を大成殿で特別公開する予定となった。

芸術による復元研究の今後

芸術の創造は科学的根拠の脆弱な、正確と不正確の境界上での曖昧な部分を内包しているが、実際にはそのことが絶えず指弾され、科学的ではないという主観的なイメージから作家の研究参加を遅らせてきた経緯がある。というよりも、あまりこれまで共同研究の実際が見られなかったといっても過言ではない。



図5　失われた「賢儒図像」2面の復元制作



図6　賢儒図像の復元（藤田志朗教授）

しかし、今回の展覧会にいたる共同研究では復元にいたる制作上のプロセスはきわめて厳密なプログラムによる正確さを秘めたものであった（図5・図6）。たとえば絵画

における復元制作では、元の絵を正確に写す、線の習熟から写し取る技術まで、まったく同様の復元制作を行うようカリキュラムされ、制作上から惹起された学術上の仮説を導き出すものであった。 芸術教員による復元研究における学際的な研究への寄与は今回の≪江戸前期の湯島聖堂≫の展観において、彫刻、絵画、CG（図7、図8）による総合的な視覚イメージが導き出す新しい学術研究の視点形成を構築する可能性を示したものと考える。



図7　CG解説の木村浩助教授（上）

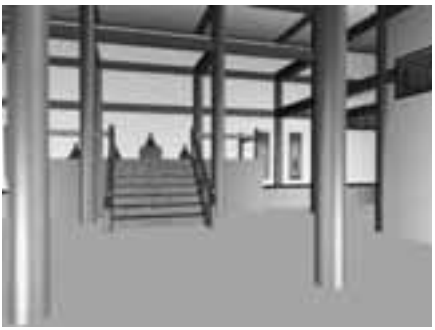


図8　CGによる礼拝空間（大成殿、左）

おわりにあたり、展覧会のご協力をいただいた学内外の多くの関係者にこの場をお借りして深甚の謝意を申し上げたい。

（もりや　まさひこ／日本美術史）